

セルフケアの詩型

梅津純子

窓枠の中を降りゆく雪片の密度の濃さよ雪国の雪

芹一把小店に求め吾が足跡すでに朧な雪道戻る

車蔽ふ雪を手袋の手に拭ふ二時間ほどの歌会を終へて

ブラシもて車の雪を払ひくれし友が突然激しく転ぶ

雪の下の落差に躓き倒れたるに「大丈夫」と友は運転し去る

「落雪注意」三カ所に立て高屋根をはみ出し垂るる積雪見上ぐ

セルフケアの詩型と短歌を謂ふ記事に深く頷く短歌との歳月

生き悩み生きあぐみ来し自らを歌集二冊にやうやう肯ふ

哀しみの限りなき世を己が生を紡ぐ言の葉六四〇首

おづおづと『風の旅』問ひ十四年『白き川』問ふ今のすべてを